

国際技能五輪の競技運営者として

—れんが積み エキスパート 三田先生への取材—

「技能と技術」編集部

はじめに

2007年11月に開催された、ユニバーサル技能五輪（第39回国際技能五輪，第7回国際アビリンピックの共同開催）に、「技能と技術」誌の編集部があります職業能力開発総合大学校からも，日本技術代表やエキスパート，ワークショップスーパーバイザ，審査員等として20名の教員が競技運営に参加しました。そこで，当誌編集部としましては，次回以降の国際大会の運営に参加される方の参考になればと思い，競技運営に携わった方にインタビューし，掲載することといたしました。

今回はれんが積み職種のエキスパートとして，国際技能五輪に協力されました職業能力開発総合大学校建築システム工学科の三田紀行先生のお話を掲載させていただきます。

編集部 どの程度の期間，この職種を経験されていますか。

三田 私は建築材料のコンクリートが元々専門ですが，この学校でブロック建築科のカリキュラムがあり，その科目の担当を15年ほどしていました。

国際技能五輪へのかかわりについては，2003年のスイス国ザンクトガレン大会でオブザーバという形で，エキスパートの補佐員として参加し，2005年フィンランド国ヘルシンキ大会と今回の日本の沼津大会ではエキスパートとして参加しまして，計6年間かかわっています。

編集部 この競技のポイントを教えてください。

三田 れんが積みの課題を作るためには，れんがを速く，正確に水平，垂直に積めることはもちろんですが，段取りと呼ばれる，れんがを積むための準備作業が大変重要です。特に，課題図面かられんがの割付を考えた原寸図の作成が迅速に行えないと，競技時間内に終了しません。作業手順に従った競技のポイントは以下のとおりです。

- 【1】 段取り（製図，墨出し，やり方，れんがの割付など：速く正確に積むための準備です。）
- 【2】 れんがおよびブロックの加工（課題によっては，れんがを斜めや円弧状に切断します。）
- 【3】 れんが積み（実際のれんが積み作業：れんがを積む速さと正確さが必要です。）
- 【4】 目地仕上げ（れんがどうしを接着する目地の仕上げ作業：美しく仕上げる必要があります。）

編集部 大会を終えてのご感想は。

三田 大変でした。

私の立場はエキスパートなのですが，結果的に会場設営等を担当するワークショップスーパーバイザの補佐の仕事もやることになってしまいました。

編集部 ワークショップスーパーバイザは別にいるのではないのですか。

三田 別の方がいるのですが，結局，過去の国際大会の状況を知っている人でないと，会場設営や資材の準備などを行うのが非常に難しいのです。その

ため、勉強してきなさいという意味合いで、私も前回、前々回と参加していきまして、特に前回のヘルシンキはエキスパート兼ワークショップスーパーバイザの調査という2つの辞令をもらって参加しています。今回の静岡大会では、実際にエキスパートとワークショップスーパーバイザの補佐の仕事がおりてきたので、会場をどう設営したらよいのか、どういう材料をそろえたらよいのか、道具をどうしたらよいのかということも実施しながらエキスパート業務を行いましたので、業務が大変でした。

編集部 エキスパート業務として苦勞されたことは。

三田 日本と諸外国とのれんが積みに関する知識、技術の差についてでした。

日本ではれんが積みというと壁や花壇をつくるための技術なのですが、海外では建物を建てるのに必要な技術なのです。そして、その技能・技術は発展してきているのです。日本は関東大震災でれんがの建物が壊れてしまってから、それ以降に耐震性を高めるために鉄筋コンクリートや鉄骨などで建物を建設するようになったので、日本ではれんがで建物をつくるのがなくなってしまいました。そのため関東大震災から85年経過したのですが、日本では進歩した技術を利用する必要がないので、れんが積みについては明治時代の技術のままなのです。諸外国は建物を効率よく建設するために、れんがの積み方等の技術や材料がかなり変わってきています。エキスパート業務としては、各国のエキスパートと協議しながら課題を決める以外に、自国の選手の指導を行わなければならないのですが、新しい技術は日本ではあまり知られていないので、最近のれんが積みの技術を選手と選手の指導者（親方）に理解してもらうのが非常に難しかったです。

また、技能検定と技能五輪国際大会というものの違いを理解してもらうのが難しかったです。

これは、日本の選手や指導者は日本の技能検定は理解しているのですが、検定の感覚で技能五輪に出場すると負けてしまうのです。検定はある程度経験を積んだ方が自分の持っている技術を審査する一種

の資格のようなものなので、検定でしっかりとしたものを作らないとだめなので、そのためのやり方は理解しているのですが、技能五輪は、勝負なので与えられた図面どおりのものができているかがポイントとなります。やり方はある程度決まっているが、こうしなければだめみたいなことはないので、そこをどのようにやりくりして、時間の短縮をするかが勝負のポイントとなります。実際の現場では目地モルタルの硬化後に次の作業に移らなければいけないような箇所でも、採点のポイントとならなければ、硬化していなくても次の作業に進むといったことが必要なのです。競技に勝つためにはそういった部分を親方たちに理解してもらい、やり方の変更を理解してもらう必要があるという啓蒙活動が大変でした。

編集部 この大会の準備や競技中で一番困ったことは。

三田 使用材料の変更でした。

日本でれんがとれんがを積むときに目地モルタルという材料を使用するのですが、その調合（配合）が明治時代のときに伝わってきたやり方なのです。具体的に説明すると、日本で行っている調合は、職人が経験で、セメントと砂と石灰に水を混ぜて現場で混ぜてつくるのですが、諸外国では、ドライパックになっているものに、水を入れるだけというやり方になっているのです。これはれんが積みの職人はれんがを積むことが仕事であり、それ以外の仕事（モルタルの調合）について責任を極力とらない（責任を分担している）やり方をしているため、諸外国のれんが積みの若い職人は日本で行っているモルタルの作り方を知らない状況になってしまったのです。そのため、今回の競技では当初日本で行っているセメントと砂と石灰を用意して、混ぜることから競技を実施しようとしたのですが、競技が始まる前日に大きな問題となって材料を取り換えてくれという話になってしまいました。

幸い現地で彼らが要望しているモルタルを手元にある材料で作ることができたので、大会運営上は大きな問題にはならなかったのですが、これが運営上一番困ったことでした。

編集部 今回のユニバーサル技能五輪を経験して、次回日本で開催するとなったときに参考となるご意見をお聞かせください。

三田 今後ワークショップスーパーバイザやエキスパートになれる方に対してですが、オブザーバという形でもよいので、実際に競技を2回ぐらい経験したほうがよいと思われます。これは、初回は顔合わせという形で知り合い、2回目は海外のエキスパート達との間でつながりができます。そして、3回目以降から、その間に培った人脈で、円滑な競技運営ができるからです。そのためには国際大会に出続けることが必要です。また、出続けることにより新しい技術を学ぶことができます。また、勝負に勝つためには物事を柔軟に考えることができ、既成概念を無視できる頭の柔らかさが必要ではないかと思えます。

参加選手に対してですが、大会3ヵ月前に課題や材料がわかるのですが、基本的な部分での練習はも

っと前から準備しないとメダルを取るのは非常に難しいと思います。例えば、過去の課題等に取り組み、経験を積むことが必要だと思えます。

全体としてですが、メダルを取るためには個人または個人企業の努力だけでは非常に難しいと思います。やはり、組織（団体や企業、学校など）のバックアップが絶対必要だと感じました。理由は、メダルを取るためには、最低でも3ヵ月間はその競技だけの準備をしなければならないのですが、選手にも生活があります。仕事の片手間ではやはり勝負に勝つのは難しいです。また、材料を購入する資金力、練習するための場所、優秀な指導者が必要となります。メダルを取るためには、国の強力な支援が必要だと痛感しました。そういう部分において、総合大もお手伝いをできるのではないかと思います。

編集部 お忙しいなか、貴重なお話をうかがうことができました。ありがとうございました。

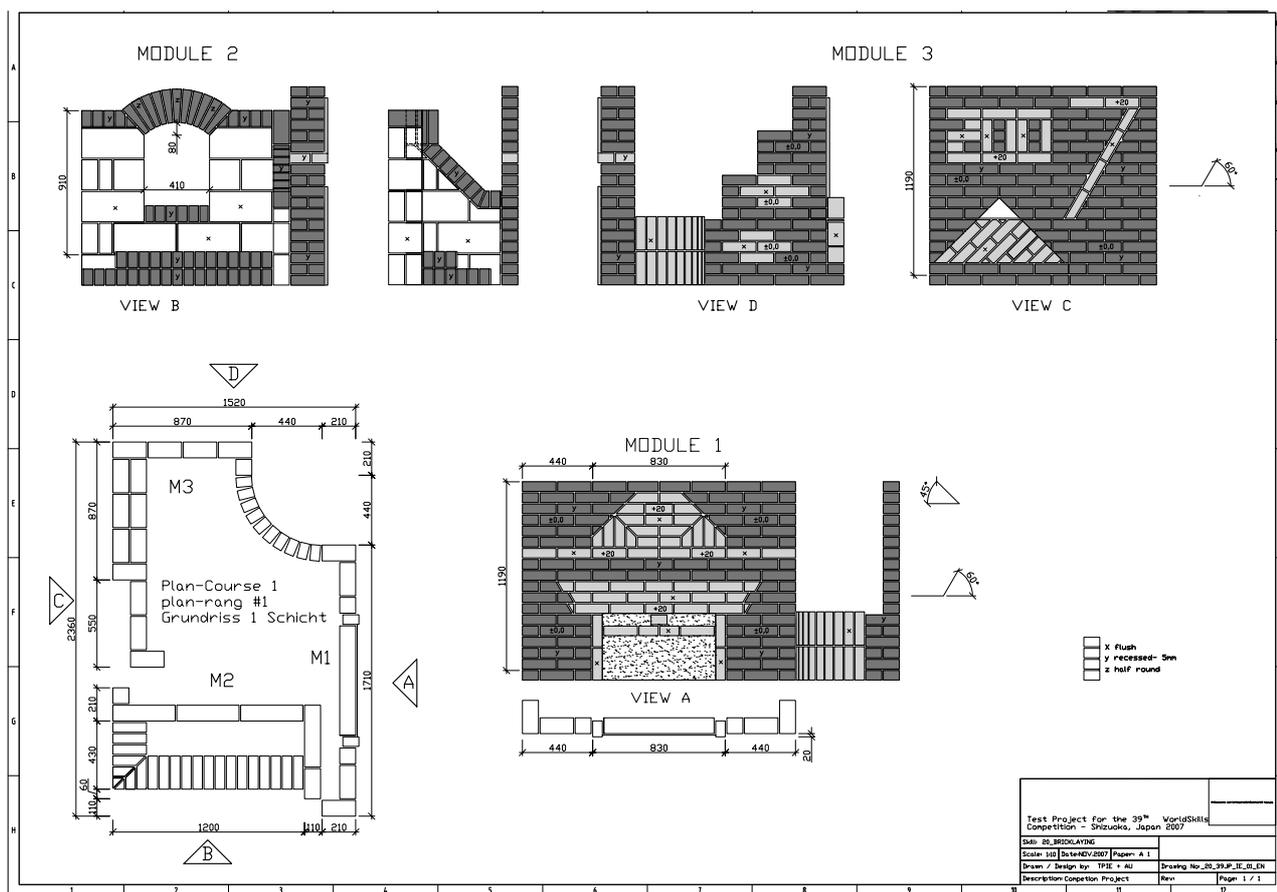


図1 れんが積み課題図